

古代中国の路寝

吉田 歆

要旨

日本古代の都城は律令制度とともに中国の影響を受けていた。もとなつた中国においても都城や宮殿の形態や性格は変化が見られる。そこで本稿では、中国の宮殿の路寝について検討する。路寝は周代の宮内正殿に当たるとされるが、文献史料上に描かれただけで実態については不明である。本稿では伝説的な史料ではあるが、そこからどのように認識されていたかを検討し、形態や機能などを明らかにする。

キーワード 路寝 先秦時代 『周礼』 『春秋』 『晏子春秋』

はじめに

日本の古代国家は、中国の律令制度を取り入れることによって国家体制を整えていった。国家の枠組みだけではなく首都についても中国のそれをモデルとして建設しようとした。しかし、中国の都城制を全面的に取り入れたわけではなく、日本側の考えや事情に従って取捨選択がなされていた。その中で日本の大極殿は中国の都城の太極殿を模倣したものと考えられる。日本の大極殿という名称の淵源は中国にあった。中国においては、曹魏の明帝によって洛陽宮が改築された際に太極殿という名称の宮殿が建設され、その後、西晋から南北朝時代にかけて宮城正殿の名称として継承されていた。そして、隋時代には一旦、使われなくなったが、唐の長

安城で再び正殿の名称として使用された。曹魏以前、後漢洛陽では德陽殿などの固有名称が付けられていたが、秦・前漢時代では前殿という名称が用いられていた。前殿という名称の宮殿が、いわば創出されたのは天下統一を成し遂げた秦始皇帝の時と推測される。始皇帝によって生み出された前殿の歴史的な意味については以前にも検討したことがある⁽¹⁾。

以上のように、中国においても宮城正殿には時代的な変遷があった。そのうちいくつかの画期があったが、大きなものとしては三つ存在した。一つは先述の始皇帝による前殿の創出である。二つ目は曹魏明帝による太極殿の建設、三つ目は隋文帝による大興城大興殿建設である。それぞれの画期の意義に関しては、これまでも検討を進めてきたが、その元となった宮殿については、まだ言及することが出来なかった。つまり、先秦時代の正殿と考えられている路寝について、必要な範囲では触れることはあっても詳しくは述べる機会がなかった。そこで本稿では、先秦時代の宮内の正殿である路寝について、あらためて検討を試みたい。

さて路寝というのは、先秦時代の宮内の正殿として史料上に見られるものである。しかし、その実像はよくわかっていない。残されている史料をもとに、これまで研究が重ねられ、後にも改めて紹介するように推測はされてきている。本稿では、まず従来の研究成果をもとに基本的な問題をまとめ、それに加えていくつかの側面を指摘してみたい。とは言っても所詮は文献史料から類推しただけの内容となっていて、実態を明らかにすることは困難である。本稿は、あくまでも文献史料に描かれた路寝や正殿につ

いて整理しようとするものである。

第一章 路寝について

第一節 六寝と六宮

路寝をめぐることは、これまでの研究でも触れられることが多いが、ほとんどの場合、宮中の正殿という説明がなされるばかりで、それ以上に詳しく論じられることは稀であったと思われる。そうした中で太田静六氏は日本の寝殿造を検討する前提として具体的に論じられ、近年では豊田裕章氏が研究されている。⁽³⁾そこで両氏の研究をもとにあらためて最低限の史料を再確認しながら路寝を中心とした宮殿群の構成について整理する。

史料1『周礼注疏』⁽⁴⁾卷六、天官冢宰・宮人

宮人 掌三王之六寝之脩、(六寝者、路寝一、小寝五、玉藻曰、朝、弁色始入、君日出而視朝、退適三路寝、聽政、使三人視大夫、大夫退、然後適小寝一、積服、是路寝以治事、小寝以時燕息焉、春秋書魯莊公薨于路寝、僖公薨于小寝、是則人君非一寝明矣、(中略)、(後略)、(〽)内は細字。以下同じ)

史料2『礼記正義』卷二九、玉藻

(前略)、朝、弁色始入、(中略)、君日出而視朝、退適三路寝、聽政、使三人視大夫、大夫退、然後適小寝一、積服、(小寝、燕寝也、積服、服三玄端、)、(後略)、

まず史料1によると、周王朝の宮殿群は六寝からなっていたと説明されている。「王之六寝」とあるように六つの寝から構成されていたとされる。この六つの寝については鄭玄の注が付されていて、それによると一棟が路寝で、残りの五棟が小寝となっているという。そして、路寝が「治事」の場、小寝が「燕息」の場であったと解釈している。つまり路寝が政治を執

る建物で小寝は王が安息するような建物であったということになる。この解釈を支えているのが『礼記』玉藻の記述で、それが史料2である。

『礼記』玉藻によると、王は路門で臣下たちから朝拝を受けた後、路寝で聴政を行い、臣下たちが政務を終えたら自らも路寝から小寝に移って寛いだということがわかる。このことから路門が受朝の場、路寝が聴政の場、小寝が安息の場というように、それぞれ機能が分化していたと理解できる。『周礼』に見える六寝も路寝が聴政の場で、他の五つの小寝が安息のための宮殿群という解釈がなされるわけである。

以上のように『周礼』や『礼記』から王宮には六つの寝という宮殿があり、そのうちの一つが路寝、その他が小寝であり、路寝は王が政治を執る宮殿、五つの小寝は安息のための宮殿であったということになる。

そして史料は省略するが、六宮というものもあり、后、つまりキサキの宮殿群があった。やはり中心に正寝があり、他に同じく五つの小寝があったとされる。王の宮殿群と対になって六棟で構成されていたとされる。太田氏が整理したように、王の六寝とキサキの六宮が存在し、六寝と六宮の構成を整理したのが図1である。もちろん実際にこのようであったかどうかは不明であり、あくまでモデル化して組み立てるとこのような形態に推測できるといえるものである。

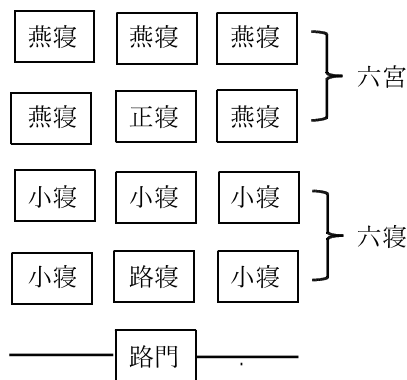


図1 六寝と六宮

第二節 死去の場として

路寝が聴政の場であることを、『礼記』玉藻をもとにあらためて整理してきた。しかし、路寝にはそれ以外にも君主が死去する場としての側面があった。このような側面があったことはすでに言及したことがあるが、ここではあまり詳しく取り上げることが出来なかった。そこで本節ではあらためて詳しく触れてみたい。

史料3 『礼記正義』巻四四、喪大記

(前略)、君、夫人卒^二於路寝^一、大夫、世婦卒^二於適寝^一、内子未命、則死^二於下室^一、遷^二戸于寝^一、士、士之妻、皆死^二于寝^一、^⑤言死者必皆於^二正處^一也、寝、室通耳、其尊者所不^レ燕焉、君謂^二之路寝^一、大夫謂^二之適寝^一、士或謂^二之適室^一、此變^二命婦^一言^二世婦^一者、明尊卑同也、世婦以^二君下寝之上^一為^二適寝^一、内子、卿之妻也、下室、其燕處也、(中略)、(後略)、

路寝が君主の死去の場として見えるのは、やはり『礼記』である。史料3『礼記正義』喪大記によると、いわゆる支配者階級の人たちの死去する場所がそれぞれの階層ごとに決められていたことが知られる。もちろんこのような原則が本当に守られていたり、現実に行われていたのかは不明である。この点を踏まえた上で整理してみたい。

『礼記』喪大記の内容をまとめると以下のようになる。

- ①君・夫人は路寝で卒す。
- ②大夫・世婦は適寝で卒す。
- ③内子未命の者は下室で死去して、後に寝に遷される。
- ④士・士の妻は寝で死す。

喪大記によれば、このように四つのパターンに分かれていたことがわかる。すなわち、君とその夫人の死去する場所は路寝であり、同様に大夫とその世婦は適寝、内子未命の者は下室で亡くなった後に寝に遺体が遷さ

れ、士とその妻は寝で亡なるということになる。

少し補足説明をすると、まず世婦について、『礼記正義』喪大記の同じ箇所^⑤の正義では次のように説明している。「大夫妻曰^二命婦^一、而云^二世婦^一、世婦は諸侯之次婦、今既明諸侯世婦尊與^二命婦^一敵、故互言見義、今命婦死^二於正寝^一、則世婦死^二女君次寝之上^一也、(後略)」とあり、大夫の妻は命婦というのだが、ここでは世婦と言っている点に疑問を投げかけ、世婦は諸侯の「次婦」なので諸侯の世婦は大夫の命婦に匹敵する地位だからと解釈している。^⑥この解釈に従えば、大夫の妻は「命婦」とあるべきということになる。果たしてそこまで厳密な書き分けがなされているのかどうかわからない。ここでは文意としては大夫とその妻というくらいで捉えておきたい。次の内子未命というのは、鄭玄注によると「内子、卿之妻也、下室、其燕處也」とあり、内子というのは卿の妻のことであり、その死去の場である下室とはその妻の「燕處」、つまり安息する場所であるということと解釈される。ではなぜ彼女は寝といった正殿ではなく下室という安息の場所で死去しなければならないのかというと、正義によれば、もし彼女がまだ君命を受けていないなら、はじめにその死去の場所は下室にあるのであって、小斂の後にその戸を正寝に移すのであると解釈されている。つまり、「未命」とはまだ正式に夫人となっていない場合を意味していると思われる、その場合は正式な正寝で死去することが出来ず下室で死去することになり、その上で、小斂の後に遺体を正寝に移すということと注解されている。しかし、なぜ卿の配偶者のうちの正式に夫人となっていない者の場合が特記されているのかは問題として残っている。そして、夫の卿の場合を明記していないことも注意される。鄭玄は内子を「卿之妻」と解釈したが、実際にはそれにとどまらないのかもしれない。または喪大記の記事には本来は卿についても記載されていたが、いずれかの段階で脱落してしまった可能性もある。もし卿に関する記述の脱落を想定せず現状のテキストで理解しようとするなら、ここに見る内子はそれ以前に見えている君や

大夫の妻を指していることと見ることもできる。つまり、君の夫人、大夫の世婦はそれぞれ路寝・適寝で死去すると述べた直後にあることからすると、彼女たちについての補足説明とみることも可能であろう。すなわち、彼女たちがまだ正式な夫人や世婦といった妻の地位に就いていない場合を想定したものということになる。ただし、この場合も続く士の妻には適用されないように読まざるをえなくなり、その違いがどうして生じるのかが問題となる。この問題については今後の課題とせざるを得ないが、喪大記の記述全体の文意としては、君の夫人と大夫の世婦について、あるいは直前大夫の世婦について適用され、士の妻には適用されない規定として理解できよう。また、内子を鄭玄は「卿之妻」と解釈したが、いわゆる中国における身分階層の卿・大夫・士という場合の卿を指すと理解すると、先述のように卿とその妻の場合については喪大記には記述がない。そのためこの内子は、君と大夫、あるいは直前の大夫の妻たちを指していると考えざるをえない。とすると鄭玄の言う「卿」は身分としての卿・大夫・士の卿を指している可能性と厳密な身分としての卿ではなく上級支配層全般を指している可能性の二つが考えられる。鄭玄自身はどちらの意味で卿と言っているのかは残念ながら明確に出来ない。普通に受け取ると前者の可能性が高いが、いずれにしても喪大記の文全体の構成からは先述のように解釈できることになる。

以上に見てきたように、全体を正確に理解するのは困難でいくつかの解釈が可能性として残ってしまうが、君と夫人たちが階層に応じて路寝などで死去するものとされていたことがえる。このことから路寝には政治を執る場としての性格以外にも死去する場という性格があったことがわかる。このような性格を持つていることについては、鄭玄が注を付している。すなわち、「言死者必皆於正處一也」とあり、死去する場所は必ず正處においてなされるということである。そのため六寝のうちの正殿である路寝で死去するということになる。大夫と世婦の適寝や士と妻の寝もそ

れぞれの正殿としての正寝を意味していると解釈される。

『礼記』喪大記の記述をそのまま受け取ると、以上のように路寝は死去する場所としての側面も持っていたことになる。それでは現実にはどうであったのか。その実例についても以前に簡単にまとめたことがあるが、やはり詳しく言及できなかった^⑦ので、ここであらためて検討してみたい。

まず正殿である路寝が本当に死去する場所となっていたのかどうかについては当然疑問が持たれる。例えば、郭嵩燾氏が疑問を呈している^⑧。もちろん字義通りに理解できるわけではないが、文献史料を整理することとしたい。

注(5) 拙稿でもごく簡単に触れたように、先秦時代、君主が路寝で死去したとする史料が存在する。それは『春秋』に登場し、魯公のうちの数人が路寝で死去したと記されている。そこでまず『春秋』に見える魯公たちの死去記事から死去した宮殿などがわかるものを拾い上げて表1に整理した。前にも述べたように魯公たちが本当に路寝で死を迎えたのかどうかは、実際のところ確認のしようがなく、とりあえず記事通りに受け取って検討を進めるしかない。

また、『春秋』には周知のように『春秋左氏伝』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』の三伝がある。表1には三伝の記載を統合している。

それでは表1から宮殿で死去した事例をあらためて見ていきたい。まず荘公・宣公・成公の三人が路寝で死去

したことになる。路寝以外では、僖公が小寝、文公が台下、定公が高寝、襄公が楚宮でそれぞれ死去したと記されている。このように三人が路寝で亡くなったとする記事があり、確かに路寝で死去することが基本的なあり方であったと考えられる。それでは路寝以

表1 魯公の死去場所

年月日	場所
莊公32年8月癸亥	路寝
僖公33年12月乙巳	小寝
文公18年2月丁丑	台下
宣公18年10月壬戌	路寝
成公18年8月己丑	路寝
襄公31年6月辛巳	楚宮
定公15年5月壬申	高寝

凡例)『春秋』三伝による。

外の場所で亡くなった事例はどういうことであつたのかを次に確認したい。

はじめに小寝で亡くなったとされる僖公の場合を検討する。『春秋左伝正義』卷一七、僖公三三年冬条には次のようにある。

史料4 『春秋左伝正義』卷一七、僖公三三年冬条・伝文

(前略)、薨_二于小寝_一、即安也、(小寝、夫人寝也、譏_二公就_レ所_レ安、不_レ終_二于路寝_一)

ここから僖公が小寝で薨去したことがわかるが、杜預注は、小寝とは夫人の寝であり、僖公が安樂に浸つて路寝で人生の終わりを迎えられなかったことを譏るものであると解釈している。これによると僖公が死去した小寝とは彼の夫人の寝殿であつたということになる。

史料5 『春秋穀梁伝注疏』卷九、僖公三三年二月乙巳条

公薨_二于小寝_一、(小寝、内寝)、○小寝、非正也、(非_二路寝_一、疏、小寝、非正也、○釈曰、傳_二發_二此例_一者、以隱公不地、桓公非正、今僖公雖_レ卒、而没_二於婦人之手_一、故發_二傳以惡_レ之也)

『春秋穀梁伝』では小寝とは非正なりと解釈されている。范甯注では、小寝は内寝のこととするとともに非正については路寝にあらずと注解している。『春秋穀梁伝』でも小寝を非正という理解をしていることがわかる。小寝で死去することは本来あるべき形ではないと認識していたことになる。そして、明確には記していないが、当然路寝での死を念頭に置いていたと推測される。

以上のように僖公が死去した小寝について、『春秋左氏伝』と『春秋穀梁伝』から少なくとも本来のあり方とは異なっているという認識を読み取ることが出来る。『春秋左氏伝』では「即安」とあり、『春秋穀梁伝』では「非正」とある。そして、その反対に本来は路寝での死を想定していることもわかった。

次に台下で死去した文公について取り上げる。

史料6 『春秋穀梁伝注疏』卷一一、文公一八年二月丁丑条

公薨_二于台下_一、○台下、非正也、(疏、台下非正也、○釈曰、非正與_レ僖同、重發_レ之者、僖是小寝、此則台下、嫌_レ異、故發_レ之)

文公の場合に関しては、『春秋穀梁伝』はやはり非正なりとしている。小寝の場合と同じく本来死を迎える場所ではなかつたと認識していることがわかる。

ついで高寝で死去した定公を見てみたい。

史料7 『春秋左伝正義』卷五六、定公一五年五月壬申条・経文

公薨_二于高寝_一、(高寝、宮名、不_二於路寝_一、失_二其所_一)

『春秋』経文ではただ定公が高寝で薨去したと記されているが、杜預注では高寝とは宮名で路寝ではないためその所を失つたと注解している。やはり高寝も路寝とは別のものであり、それは本来のあり方とは違っているという認識である。

史料8 『春秋穀梁伝注疏』卷一九、定公一五年五月壬申条

公薨_二于高寝_一、(高寝、宮名)、○高寝、非正也、(疏、高寝非正也、

○釈曰、重發_レ伝何、解高者大名、嫌_二是路寝之流_一、故發_レ伝明_レ之)『春秋穀梁伝』は、ここでも高寝は非正なりとしている。小寝や台下と同じく非正と理解していることになる。

なおここに見える高寝について補足をしておきたい。高寝とあることからこれも宮殿の一つと考えられる。さらに小寝とは異なつて「高」とあるので、小寝よりは公的な性格が強いように感じられる。しかし、こうした印象を受けるということでしかなく、やはりその実態はよくわからない。そうした中で『春秋公羊伝』の何休注は一定の解釈を示そうとしている。

史料9 『春秋公羊伝注疏』卷九、莊公三三年八月癸亥条

公薨_二于路寝_一、○路寝者何、正寝也、(公之正居也、天子諸侯皆有_二三寝_一、一曰高寝、二曰路寝、三曰小寝、父居_二高寝_一、子居_二路寝_一、孫從_二王父母_一、妻從_二夫寝_一、夫人居_二小寝_一、(後略))

何休注では、天子諸侯には三寢があり、それは高寢・路寢・小寢の三つであるとしている。そして、父は高寢、子は路寢に居住し、孫は王父母、妻は夫の寢に従い、夫人は小寢に居住すると注解している。つまり、高寢は君主の父が居住する宮殿ということになる。以上のように天子諸侯には高寢・路寢・小寢の三種類の寢殿があったとされ、このうち父が居住する高寢で死去したことを解釈できることになる。しかし、この解釈が本当に正しいかどうかは判断が難しい。確かに高寢という名称からはそれ相応の尊貴性を帯びているように感じられるが、管見の限り確かめられないようである。今後の課題とせざるを得ない。

最後に楚宮で死去した襄公の場合について検討する。

史料10『春秋左伝正義』巻四〇、襄公三十一年六月辛巳条・経文

公薨_二于楚宮_一、_レ公不_レ居_二先君之路寢_一、而安所樂、失_二其所_一也、_レ後略_レ。

史料11『春秋公羊伝注疏』巻二一、襄公三十一年六月辛巳条

公薨_二于楚宮_一、_レ公朝_レ楚、好_二其宮_一、_レ歸而作_レ之、故名_レ之云_レ爾、_レ後略_レ。

史料12『春秋穀梁伝注疏』巻一六、襄公三十一年六月辛巳条

公薨_二于楚宮_一、○楚宮、非正也、_レ楚宮、別宮名、非_二路寢_一。

史料10の『春秋左氏伝』の杜預注では楚宮での死去について路寢ではなくその所を失したものと注解している。『春秋公羊伝』では何休注が襄公は楚に朝して楚の宮を好きになったため帰ってきてから同じものを作った。それで楚宮という名称となったとその由来を解説している(史料11)。『春秋穀梁伝』では楚宮を「非正也」とし、范甯注では別宮のことで路寢ではないと解釈している(史料12)。

楚宮については、『春秋公羊伝』の何休注がより具体的な解釈を行っているが、本当に襄公が楚の宮を気に入って再現したものなのかはよくわからないところである。少なくとも路寢そのものではないことは言えるが、

真相は不明としか言えない。

以上に見てきたように、魯公たちの死去場所をまとめると三人が路寢で亡くなった他は、一例ずつとなっている。事例数が限られているため、簡単には言えないが、路寢が複数例存在していることは確かである。このことから路寢が死去する主な宮殿であった、あるいはそのように認識されていたことは認められよう。もちろん、それが『礼記』喪大記のように原則となっていたかどうか、本当にそうになっていたかどうかは慎重に考えていく必要がある。

第三節 君の解釈

前節では『礼記』喪大記と『春秋』三伝から君主が路寢で死去する問題について規則性と実態の両面から検討し、恐らく現実はどうあれ路寢に君主の死去場所としての性格があった、あるいはそのような認識があったことを確認してきた。その中で喪大記では君と夫人が路寢で亡くなるとしていることから、ここまでの記述では君主という表現で説明してきた。しかし、喪大記の「君」が具体的にどのような人物を指しているかは少し問題を含んでいる。そこで次にこの「君」について触れてみたい。

路寢で死去した事例を『春秋』の中で探ってきた。つまり、これらは魯公の事例となる。その点では周王(天子)も同様に捉えてよいかどうかは厳密には別の問題となるのである。言うまでもなく魯公と周王では階層差が存在し、周王にもそのまま当てはめられるかは簡単には判断できないことになる。

史料13『礼記正義』巻四四、喪大記・正義

疏、君夫至于寢、○正義曰、此一經明_二貴賤死寢不_レ同也、君、謂諸侯也、諸侯三寢、一正者、曰_二路寢_一、余二曰_二小寢_一、卒_レ婦_二於正_一、故在_二路寢_一也、夫人亦有_二三寢_一、一正二小、亦卒_レ正者也、_レ後略_レ。

『礼記正義』喪大記の正義（史料13）では「君」について「謂諸侯也」とあり、この篇では天子ではなく諸侯以下に関する内容となっていると解釈している。つまり、この「君」には天子は含まれていないということになる。

史料14 『大戴礼記』四代

（前略）、天子曰^レ崩、諸侯曰^レ薨、大夫曰^レ卒、士曰^三不禄^一、庶人曰^レ死、（後略）、

『大戴礼記』四代（史料14）には各階層ごとに、その死をどのように表現するかがまとめられている。それによると次のようになる。

天子―崩
諸侯―薨
大夫―卒
士―不禄
庶人―死

このように天子の死は「崩」と表現されることになっていた。あらためて『礼記』喪大記を見ると、君・夫人は路寝で「卒」すとなっていて、「崩」とは書かれていない。つまり、「君」は天子ではないことになる。一方、『春秋』に見える魯公たちについて見直すと、彼らは「薨」ずと表現されていて、『大戴礼記』四代の原則に合致していることがわかる。以上のことを踏まえると「君」には天子が含まれていないということになり、厳密に言うとなつても路寝で死去する原則であったかどうかは別問題となる。

しかし、逆に「卒」は『大戴礼記』四代では大夫に使われることになっている、「君」が諸侯を指すとするなら「薨」とあるべきなので一致しないこととなる。また、喪大記では大夫については「卒」と表現していて、これは『大戴礼記』の原則に合致している。さらに喪大記では士については「死」と表現されているが、やはり『大戴礼記』では士は「不禄」と表現されるべきであり、「死」は庶人に使われるものとしていて、食い違っ

ている。

以上のように『礼記』喪大記と『大戴礼記』四代では死を表す表現に相違があったことがわかる。『大戴礼記』の五つの階層ごとの表現方法はよく整理されていてわかりやすい。それに対して『礼記』喪大記の記述は、それほど正確に書き分けていない可能性が高いと考えられる。そして、「君」の次に「大夫」の場合が続き、しかも両者ともに「卒」と表現されている。このことからすると喪大記では大夫以上の支配層の死を「卒」と表現しているということになり、「君」の意味も広く理解するのが妥当となる。

なお周王が死去した事例も見ておきたい。場所も含めて詳しくわかるような事例は稀で管見に入つた成王の場合を見てみたい。

史料15 『尚書正義』卷一八、顧命

（前略）、越^三翼日乙丑^一、王崩、（中略）、太保命^三仲桓、南宮毛^一、（中略）、俾^下爰^三齊侯呂伋^一、以^三二幹戈、虎賁百人^一、逆^中子釗於南門之外^上、〈臣子皆侍^三左右^一、將^レ正太子之尊^一、故出^三於路寝門外^一、（中略）〉、延入^三翼室^一、恤^三宅宗^一、（明室、路寝、延^レ之使^レ居^レ憂、為^三天下宗主^一、丁卯、命作冊度、（中略）〉、（疏、（中略）〉、○正義曰、釈言云、翼明也、喪大記云、君夫人卒^三於路寝^一、以諸侯薨^三於路寝^一、知^三天子亦崩^三於路寝^一、今延^三太子入^レ室、必延入^三喪所^一、知^三翼室是明室^一、謂路寝也、路寝之次者、故以明言之、延^レ之使^レ憂居^三喪主^一、為^三天下宗主^一也、（後略）

『尚書正義』顧命（史料15）によると周の成王が崩じたとあり、『大戴礼記』の規定の通り、「崩」という表現がなされていることがわかる。天子の死を「崩」と表現していたことが確認できる。そして、成王の死を受けて子の釗が翼室に引き入れられたとある。この翼室がどのようなものかが問題になる。

まず『大漢和辞典』では「正室の左右にある室をいふ」と説明する。⁹⁾つ

まり、正室の両脇の部屋ということである。『尚書正義』の孔安国伝には、「明室、路寝」とある。正義には翼室は明室のことで路寝のことであり、天子も路寝で崩すことが知られると注解している。このように翼室は明室のことで路寝のことであるとし、そこで成王が亡くなったと理解して、周王も路寝で死去したとしているのである。ただし、この解釈が万全かは慎重に考える必要がある。翼室を廟とする解釈も存在するからである。翼室の解釈をめぐる議論は、すでに松浦千春氏が整理され、やはり路寝のことと見ることができるとされている。¹⁰⁾ 翼室を廟と見る解釈が正しいとする、周王が路寝で死去した事例とはならない。しかし、松浦氏の所説のように路寝と見る方が整合性があるように考えられる。他方、実際にはそもそも成王が翼室や路寝で亡くなったと明記されているわけではないなど、厳密には不明なところもある。結局、成王の崩御記事は参考とはなるものの不明瞭な要素を排除しきれず、ここでは結論を急がず今後の研究の進展を俟ちたい。翻って『礼記』も天子や諸侯などと明記しないで「君」と記している点を重視するなら、厳密な表現というよりは天子や諸侯を含んだ表現と見るのが穏当なのかもしれない。例えば『大漢和辞典』でも「君」には両者を含めている。¹¹⁾

第二章 質素な宮殿の系譜

前章では路寝について限られた文献史料から検討を行った。その結果、やはり詳細な実態を明らかにすることは出来なかったが、ひとまずは君主が政治を執る聴政の場であるだけでなく、死去する場でもあった、あるいはそのように認識されていたらしいことがうかがえた。その君主に天子・周王も含むかは確定できないが含意するものと見て不都合はなさそうである。そして、それは宮内諸殿舎のうちで路寝が正殿であったことと関係していた。路寝以外の宮殿で死去した場合は、それは「非正」と認識さ

れ、場合によっては批判的なニュアンスを含む評価がなされていたのである。このように路寝は宮内の正殿としての性格を持ち、君主権と密接に関わる宮殿であった。あるいはそのように認識されていたのである。その意味では路寝は権力の象徴として壮麗であることが求められたと予想される。しかし、古代中国の価値観は複雑であり簡単に理解することは出来ない。中国都城の正殿という現在の北京紫禁城の正殿である太和殿が想起され、巨大で壮麗な宮殿建築を思い浮かべるが、逆に君主の宮殿は質素であるべきとする考え方もあった。そこで次に路寝の前提となった宮殿の有り様に迫ってみたい。だが同じように数少ない文献史料に頼るしかなく、しかもその記述内容をそのまま信じることも出来ないため、あくまでもどのように考えられていたのかを読み取ることになる。その意味では空理空論でしかないことをあらかじめお断りしておく。

路寝そのものの実態も明らかでない中、その前提となった宮殿に迫ろうとするのは不可能なのであるが、堯舜の宮殿に関する史料がいくつか存在している。もちろん、堯舜禹は伝説上の帝王であり、実在したかどうかも疑わしいので、彼らに関する史料をそのまま事実として受け取ることとは出来ない。しかし、その記述からどのように認識されていたかをうかがうことは出来る。そして、その認識は中国社会の中でも一定の影響力を持ち続けてきたと考えられる。

堯舜禹時代の宮殿については、すでに梁思成氏¹²⁾や蕭默氏¹³⁾、『中国宮殿史』¹⁴⁾などが触れている。ここでは、後に詳しく見ていく『史記』などをもとに質素な段階の宮殿建築として紹介されている。特に『中国宮殿史』は商(殷)代前期の宮殿建築基址は、史料に見える素朴な段階に相当し、蕭氏も偃師二里头遺跡の宮殿跡を史料に見える記述と符合させている点は注目される。発掘調査によって明らかになってきた宮殿遺構との関係が指摘され、これまで観念上の存在であったものが、具体的な遺構と併せて議論できるようにしたのである。このように重要な研究が蓄積されてきたが、あま

り詳細に言及されているわけではなく、記述も簡単なものとなっている。そこで本章ではもう少し詳しく史料を整理してみたい。

史料16『史記』卷一三〇、太史公自序

（前略）、太史公仕^三於建元、元封之間、愍^下學者之不^三達其意^二而師悖^上、乃論^二六家之要指^一曰、（中略）、墨者亦尚^二堯舜道^一、言^二其德行^一曰、堂高三尺、土階三等、茅茨不^レ翦、采椽不^レ刮、食^二土簋^一、啜^二土刑^一、糲粱之食、藜藿之羹、夏日葛衣、冬日鹿裘、（後略）、

史料17『墨子校注』卷六、節用中

（前略）、古者堯治^二天下^一、南撫^二交趾^一、北降^二幽都^一、東西至^二日所出入^一、莫^レ不^二賓服^一、逮^レ至^二其厚愛^一、黍稷不^レ二、羹藪不^レ重、飯^二於土墼^一、啜^二於土形^一、斗以酌、俛仰周旋威儀之礼、聖王弗^レ為、（後略）

堯舜の宮殿についてまとめた形で記したものに『史記』の太史公自序がある（史料16）。司馬遷の父の司馬談が六家の学問の要旨をまとめた中に次のようにある。墨家は堯舜の道を尊ぶとして徳行の具体的な内容をあげている。その中に「堂高三尺、土階三等、茅茨不翦、采椽不刮」という一節がある。つまり、堯舜が住んでいた建物は堂の高さが三尺で土の階段は三段で、屋根に葺いた茅は切り揃えず垂木も削らない、といったような質素なものであったという。こうした質素な宮殿を尊重するのは墨子の思想に相応しいと感じられる。しかし、現在伝えられている『墨子』を見ると、同じ記述は見えない。実は『後漢書』卷二七、張典伝の注に「墨子曰、堯舜、堂高三尺、土階三等、茅茨不^レ翦、采椽不^レ斲、飯^二土簋^一、啜^二土刑^一」とあり、明確に墨子の言説として引用している。しかし、吉川忠夫訓注『後漢書』第四冊は、やはり現在の『墨子』のテキストには見えないと脚注を付している。⁽¹⁵⁾

『墨子校注』卷六、節用中（史料17）を見ると、「古之聖王」の飲食の方法として「飯^二於土墼^一、啜^二於土形^一」があげられている。この記述は『史

記』の「食^二土簋^一、啜^二土刑^一」と用字は異なるものの対応している。しかし、建物の説明部分は存在しない。つまり、粗末な食器で飲食していたとは説かれているが宮殿に関しては全く触れていないのである。この違いが何によるのかはわからないが、司馬談が基づいた『墨子』には記載があったのか、現行の『墨子』にはいずれかの段階で脱落したのかなど、いくつかの可能性が考えられるが、門外漢のため断案を示すことは出来ない。しかし、『墨子問詁』は佚文としてあげ、『墨子校注』もこれを引き継いで佚文として採用している。前者は、同様の記述が見られる書を例示した上で、時代が下る諸書は『史記』太史公自序に基づいたものとし、本来は『墨子』に記述があったと推定している。⁽¹⁶⁾ 後者も前者の推定に従っている。そこで、次に『墨子問詁』『墨子校注』が参照している諸史料を見直しながら問題点を整理してみたい。

さて、『韓非子』にも同様の記述がある。

史料18『史記』卷六、秦始皇本紀、二世二年（紀元前二〇八）条

右丞相去疾、左丞相斯、將軍馮劫進諫曰、（中略）、請且止^二阿房宮作^一者、減^二省四辺戍^一、二世曰、吾聞^二三之韓子^一曰、堯舜采椽不^レ刮、茅茨不^レ翦、飯^二土墼^一、啜^二土形^一、（中略）、禹（中略）、身自持^二築甬^一、脛母^レ毛、（後略）、

史料19『史記』卷八七、李斯列伝

（前略）、二世責問^二李斯^一曰、吾有^二私議^一而有^レ所^レ聞^二於韓子^一也、曰、堯之有^二天下^一也、堂高三尺、采椽不^レ斲、茅茨不^レ翦、（後略）、

史料20『韓非子集解』卷三、十過

（前略）、由余対曰、臣聞、昔者堯有^二天下^一、飯^二於土簋^一、飲^二於土刑^一、（後略）、

史料21『韓非子集解』卷二二、五蠹

（前略）、堯之王^二天下^一也、（中略）、茅茨不^レ翦、采椽不^レ斲、（中略）、禹之王^二天下^一也、身執^二耒耜^一、（後略）、

史料18によると、秦の始皇帝が亡くなった後、二世皇帝は始皇帝が造営をはじめた阿房宮の工事を続行した。そこで馮去疾・李斯・馮劫らがその他の事業も含めて二世皇帝を諫めて阿房宮造営の中止などを求めた。それに対して二世皇帝は次のように反論したという。すなわち、韓子によれば堯舜は「采椽不_レ刮、茅茨不_レ翦、飯_二土墼_一、啜_二土形_一」、つまり先にも見たように質素な宮殿で生活していたというし、禹は「身自持_二築甍_一、脛母_レ毛_一」、つまり自ら杵や鋤を持って脛の毛もすり切れるまで働いた、⁽¹⁷⁾という述べ、自分はこうした聖人たちを手本にすることはできない。先帝の始皇帝の事業を継承して天子の名にふさわしくしたいと主張した。だ**いぶ**意識となつてしまつたが、ここでは二世皇帝の発言の中に韓子、すな**わち**韓非子の言説が引かれていて、先に挙げた質素さを表す表現が使われている。その中には「采椽不_レ刮、茅茨不_レ翦」があり堯舜の宮殿の表現と同じものが使用されている。しかし、「堂高三尺、土階三等」は見えない。このエピソードと同様の話が李斯列伝にも見える(史料19)。ここでは李斯が二世皇帝を諫めていて、同じように二世皇帝が反論している様子が描かれている。やはり二世皇帝は韓子によればとして次のように述べている。堯は、「堂高三尺、采椽不_レ斲、茅茨不_レ翦、(中略)、飯_二土甌_一、啜_二土鋼_一」⁽¹⁸⁾というように、質素な生活をしていたという。ここに**あが**つている表現は、前にも見た太史公自序と基本的には共通するものである。ただし、二世皇帝二年の記事では堯舜の事績として語られているのに対して、李斯列伝では堯のみが名前としては**あ**げられていて、少しだけ異なっている。堯舜なのか堯だけなのかの違いはあるが、いずれにしても質素な宮殿に住んでいたという内容は共通していることがわかる。しかし、ここでも二世皇帝は韓子、つまり韓非子の言説として述べていて、二世皇帝二年の記事と同じである。

つまり太史公自序では堯舜の宮殿の質素さは墨子の言説として引用されているのに対して、二世皇帝は同じことを韓非子の言説として参照して

いるのである。それでは『韓非子』はどのようになっているのか。

『韓非子集解』巻三、十過(史料20)には、戎王が由余を使者として秦に派遣した話がある。その時、秦の穆公が由余に昔の明主について尋ねると、由余が堯をあげてその質素な様子を説明したという。その質素な生活について「飯_二於土簋_一、飲_二於土鋼_一」と表現されている。同じく巻二二、五蠹(史料21)には「茅茨不_レ翦、采椽不_レ斲」と見えている。二世皇帝は韓非子の言説として宮殿の質素な様子を述べているが、現在伝わっている『韓非子』には大体同じ表現が見えているのである。

以上のように堯舜、あるいは堯の宮殿の質素さを称える記述の関係が複雑であることがわかった。要約すると、『史記』太史公自序は墨子に基づいているが、現行の『墨子』には同じ表現はなく、一方、同じ『史記』でも二世皇帝二年の記事と李斯列伝では韓非子の言説として引用されているが、こちらは現行の『韓非子』には大体同じ表現がある。このように墨子の言説として記述されていながら現行の『墨子』には同じ記述が見えないのである。この問題についてはいくつかの可能性が考えられよう。もと**も**とは存在したが、現行のテキストには脱落してしまった可能性もある一方、実際にはもと**か**ら存在しなかったということもあり得なくもない。しかし、太史公自序は司馬遷自身の序であり父の談の事績として紹介しているから、司馬遷は何らかの根拠をもとに執筆していると考えられる。するとやはり『墨子』かそれに関連するものには記載されていたことが推測される。ただし、談も何に基づいていたのかは問題で、六家の思想をまとめていることからすると必ずしもそれぞれのテキストを直接引用したわけではないかもしれない。

また、墨子と韓非子の両者が典拠とされているが、年代的には細かい部分ごとの成立過程をひとまずおくと『墨子』の方が先行していると見られることから、墨子の言説があつたとすればそれが先にあって韓非子はそれをもとにしていたということが考えられる。

他方、関連する史料が他にも存在する。次にそれらを見ていきたい。

史料22『新書校注』巻七、退讓

（前略）、翟王使使至_レ楚、楚王欲_レ誇_レ之、故饗_二客於章華之台上_一、上者三休、而乃至_二其上_一、楚王曰、翟國亦有_二此台_一乎、使者曰、否、翟、婁國也、惡_レ見_二此台_一也、翟王之自為_レ室也、堂高三尺、壤陞三桑、茆茨弗_レ剪、采椽弗_レ刮、且翟王猶以作_レ之者大苦、居_レ之者大佚、翟國惡_レ見_二此台_一也、楚王媿、

まず『新書』を見てみたい。『新書』は前漢の賈誼の著作とされ、秦が滅亡した原因を論じた過秦篇などを含む政治的な議論を集めた書物である。その中に次のようなエピソードが描かれている（史料22）。

翟王が使者を楚に遣わしたところ、楚王が使者を章華台でもてなし、翟国にはこのような立派な台榭はあるか、と尋ねた。すると使者はありませんと答えた上で、翟王の宮殿は「堂高三尺、壤陞三桑、茆茨弗_レ剪、采椽弗_レ刮」であると説明した。つまり、楚王としては自分の章華台のような壮麗な台榭はあるかと言って自らの権力の大きさを誇示しようとしたのであるが、使者は存在しないと解答しただけではなく、逆にとても質素な宮殿でありそれさえもつたいないと思っていると答えて、むしろ翟王の優位性を説いたという。贅沢な台榭より質素な宮殿の方が優れているという価値観に基づいている。ここで注目されるのが堂高三尺以下、すで見えた堯舜の宮殿を描写する際の定型表現が使われている点である。若干字句が異なっているが、内容は同じである。「壤陞三桑」の「壤」は土と同義であり、「桑」は『大漢和辞典』にも見えないようであるが、「累」と同義とすると「かさなる」という意味で三段重なっているということになるのである。続く「茆茨弗_レ剪」「采椽弗_レ刮」も「茆」は「茅」に通じ⁽¹⁸⁾、「弗」も否定の意味なので「不」と同義である。また、「剪」は「翦」の俗字である⁽¹⁹⁾。以上のことから、このエピソードの表現は用字に違いはあるものの内容は堯舜の宮殿に使われている定型表現と同じものと言える。しかし、

堯舜の名前も墨子や韓非子のことも出てこない点が異なっている。

史料23『韓詩外伝』巻八、第二章

齊景公使使_三於楚_一、（中略）、楚王與_レ之上_二九重之台_一、顧_二使者_一曰、齊亦有_二台若_レ此者_一乎、（中略）、使者曰、吾君有_二治位之堂_一、（中略）、土階三等、茅茨弗_レ剪、采椽弗_レ斲、（中略）、猶以謂_レ為_レ之者勞、居_レ之者泰、（中略）、吾君惡_レ有_二台若_レ此者_一乎、（中略）、於是楚王蓋悒如也、使者可_レ謂_レ不_レ辱_二君命_一、其能專対矣、（後略）

次に『韓詩外伝』を見ておきたい（史料23）。同書は前漢の韓嬰の著作とされ、詩に関係のある伝説などを記した書で、その中に次のエピソードが収録されている。

齊の景公が使者を楚に派遣すると、楚王は九重之台に使者を上らせて、齊にはこのような台榭はあるかと尋ねた。すると使者は我が君主の宮殿は「土階三等、茅茨弗_レ剪、采椽弗_レ斲」であるがこれでもいとわしく十分であると思っていて、むしろ台榭に対しては憎悪しているくらいであると答えたという。一読してわかるように『新書』と内容的にほとんど同じである。使者を送った側が翟国か齊の景公か、また自慢をする楚側の台が章華台か九重之台かが異なっているだけである。また、質素さを表現する部分も「堂高三尺」がないだけで、用字は違うものの基本的には同様である。そして、ここでも堯舜や墨子、韓非子に触れることなく話が進められている点に注目される。

以上のように、『新書』と『韓詩外伝』にはほぼ同内容のエピソードが収載されていることがわかる。台榭を自慢するのが楚王である点は共通しているが使者を送り出す側が異なっているだけである。そして、使者が自らの王の優越性を示す中で使う、宮殿の質素さを表す表現もほぼ同じである。

このように自分の君主の宮殿を説明するわけであるが、両書ともに『史記』の記事のように墨子や韓非子を典拠としてあげていない。とすると両

書は墨子や韓非子とは直接関係がなく、独自のエピソードとして成立した可能性が考えられる。しかし、墨子や韓非子を典拠としてあげていないだけで、やはり下敷きになっていたという解釈も成り立ち得る。現時点では墨子や韓非子との関係の有無やその背景を明らかに出来ない。今後の課題としたいが、ここではもう少し情報を整理してみたい。

ここまで紹介してきた『史記』以下の諸史料の記事には一定の共通性が見られたが、それを整理したのが表2である。まず全体を墨子系・韓非子系・その他の三つに分類した。墨子系には宮殿の表現を墨子の言説としている『史記』太史公自序とその典拠となる『墨子』を分類し、韓非子系には同様に韓非子の言説としている『史記』の二世皇帝二年の記事・李斯列伝と『韓非子』を分類した。その他には、いずれにも属さない『新書』と『韓詩外伝』を分類した。

表2を見てわかるように、堂高三尺、土階三等、茅茨不翦、采椽不刮の四つの表現は『史記』では典拠とされていないが『墨子』の現行本には見えない。一方、その他に分類した『新書』『韓詩外伝』には使用されている。

前述したように典拠であるはずの『墨子』に四つの定型表現とも見えないのであるが、逆に四つとも揃っているのは太史公自序と『新書』のみということも注目される。李斯列伝と『韓詩外伝』は三句、二世皇帝二年の記事は二句が使用されていて四句すべては出てこない。

表2 質素な宮殿の表現

	墨子系		韓非子系			その他	
	墨子	史記 太史公自序	韓非子	史記 二世二年	史記 李斯列伝	新書	韓詩外伝
堂高三尺		○			○	○	
土階三等		○				○	○
茅茨不翦		○	○	○	○	○	○
采椽不刮		○	○	○	○	○	○

凡例) ○印は該当する記述があるもの

は、実は太史公自序と『新書』のみであった。そこで両者の関係が問題となる。司馬談・遷父子は前漢武帝時代の人、賈誼は文帝時代の人である。とすると賈誼の方が司馬父子より前に活動していたことになる。つまり、時系列的には賈誼が先行することになり、四句をすべて使用したのも司馬父子よりも前ということになる。そして、『新書』では典拠として『墨子』も『韓非子』もあげていない。しかもそれだけではなく何らかの典拠そのものもあげていない点も注意される。もし四句すべてを使用した最初の例が『新書』だと見ると、そこでは典拠なく使われているということになる。そうすると実はもともと『墨子』のような何か形のある典拠が存在しなかった可能性も考えられてくる。しかし、『新書』のエピソードは自分の君主の美德を主張するのが目的なので独自性を強調しようとしている可能性もあり、簡単に判断できない。『新書』も何かをもとにしていることは確かであろうから、『新書』自体が本当に最初とは考えにくく、やはり何か典拠のようなものがあつたと考えるのが穏当であろう。その際、あらためて参考となるのが『韓詩外伝』である。『韓詩外伝』巻三の第一章には舜の質素な食器などを述べた中に「飯_二於土簋_一、啜_二於土型_一」という表現が使用されている。『韓詩外伝』の場合は、巻三と先引の巻八に分かれて別々の話に組み込まれていることになる。韓嬰は文帝から景帝頃の人とされる。彼が参照したものがどのような形態をとっていたのかが問題となる。そして、翻って『墨子』を考えると、『墨子問詁』は問題の定型表現が『墨子』節用中・下にあつたことをすでに推測している。『墨子』巻六、節用中は残っているが(史料17)、節用下は現在闕となっている。確かにそこに記載があつた可能性もある。『墨子問詁』で孫詒讓は司馬談は墨子の語を要約して引用しているので、本来は『墨子』節用中・下に定型表現があつたと推測している。すると『韓詩外伝』が建物に関わる定型句と食器に関わる定型句を別々に掲げているのは意味深い。『墨子』巻六、節用中(史料17)は堯の食器の質素さを述べ、闕けている『墨子』節用下は宮

殿の質素さを述べていたのかもしれない。司馬談は両者を統合してまとめたと考えることも出来る。その意味でも孫詒讓の推論はあり得る理解である。残念ながら『墨子』節用下を見ることはできないが、元の形態がどのようなになっていたのかも検討の必要があろう。結局は今後の新出史料などに期待せざるを得ない。

以上、質素な宮殿を表現する定型表現の出所はよくわからないが、古代中国の価値観では称賛されるべきものであったことは確認できた。因みにこの定型表現は日本でも『本朝文粹』に見えている⁽²⁰⁾。

第三章 『晏子春秋』の路寝

前章では、堯舜の宮殿は質素な建物で、それが美德とされていたことを紹介してきた。もちろん本当にその通りのものであったかどうかはわからないが、定型的な表現としても使われていたことは認められた。そこで次に路寝そのものについて迫ってみたい。しかし、具体的に明らかにすることとは難しい。路寝であることが確かな遺構が見つかっているわけでもなく文献史料も詳細なものほとんどない。だが『晏子春秋』には路寝にまつわるエピソードがいくつか収載されている。その中には路寝に関する情報もある程度含まれていて参考となる。つぎに『晏子春秋』に見える路寝について検討を加えることとする。

史料24 『晏子春秋』卷二、内篇諫下第二 景公為鄒之長塗晏子諫第七

景公築路寝之台^一、三年未^レ息、(中略)、晏子諫曰、(後略)、

史料25 『晏子春秋』卷二、内篇諫下第二 景公登路寝台不終不說晏子諫第一

一八

景公登路寝之台^一、不^レ能^レ終而息乎^二陞^一、忿然而作^レ色、不^レ說、(後略)、

史料26 『晏子春秋』卷二、内篇諫下第二 景公登路寝台望国而歎晏子諫第一

一九

景公與晏子登路寝之台^一而望国、(後略)、

史料27 『晏子春秋』卷二、内篇諫下第二 景公路寝台成逢于何願合葬晏子諫而許第二〇

景公成路寝之台^一、逢于何遭^レ喪、遇晏子于途^一、(中略)、対曰、于何之母死、兆在路寝之台墉下^一、願請合^レ骨、(後略)、

史料28 『晏子春秋』卷五、内篇雜上第五、齊饑晏子因路寝之役以振民第六

景公之時饑、晏子請為^レ民發^レ粟、公不^レ許、当^レ為^レ路寝之台^一、晏子令^下吏重^二其賃^一、遠^二其兆^一、徐^二其日^一而不上^レ趨、三年、台成而民振、(後略)、

史料29 『晏子春秋』卷六、内篇雜下第六、柏常騫禳梟死將為景公請寿子識其妄第四

景公為路寝之台^一成而不^レ踊焉、柏常騫曰、君為^レ台甚急、台成、君何為而不^レ踊焉、公曰、然、有^レ梟昔者鳴、其声無^レ不^レ為也、吾惡^レ之甚、是以不^レ踊焉、(後略)、

史料30 『晏子春秋』卷七、外篇重而異者第七、景公坐路寝曰誰將有此晏子諫第一〇

景公坐^二于路寝^一、曰、美哉室、其誰將^レ有^レ此乎、(後略)、

史料31 『晏子春秋』卷七、外篇重而異者第七、景公台成盆成适願合葬其母晏子諫而許第一一

景公宿^二于路寝之宮^一、夜分、聞^二西方有^二男子哭^一、公悲^レ之、(中略)、晏子奉命往弔、而問^二偏袒之所在^一、盆成适再拜稽首而不^レ起、曰、偏袒寄^二于路寝^一、(後略)、

史料32 『晏子春秋』卷八、外篇不合經術者第八、景公上路寝聞哭声問梁丘據晏子對第二

景公上^二路寝^一、聞^二哭声^一、曰、吾若^レ聞^二哭声^一、何為者也、(後略)、『晏子春秋』から路寝が見える史料を掲出した。晏子は名を嬰といい、

春秋時代の斉の霊公・莊公・景公の三代に仕えた名臣である。『晏子春秋』は彼の言行をまとめたものとされる。⁽²⁾その中に路寝をめぐるエピソードがある。まずそれぞれの内容を簡単に紹介しておく。

史料24は、斉の景公が路寝台を築き始めて三年してもまだ終わらず、その他の造営事業も続けていた。それに対して晏子が楚の靈王の章華台などを引き合いに出して諫言し、景公はそれを受け入れて造営を中止したという話である。

史料25では、景公が路寝台に登ろうとして登り切れず途中の階段で休んでしまい、どうしてこのような高い台を作ったのかと怒りだしたところ、晏子が昔の宮殿は生活に便があればそれで足りていたと諫めた話である。

史料26は、景公が晏子と一緒に路寝台に登って国を望見し、この地位を代々継承できるかと心配している話である。

史料27は、景公が路寝台を完成させた話である。逢于何という人物の母が亡くなるが、晏子に会って言うことには、亡き母を埋葬したいが墓域が路寝台の敷地内に入ってしまったと訴えた。そこで晏子が景公に願って埋葬することを許可させたという話である。

史料28は、景公の時に饑饉が起こったが、晏子はわざと路寝台の建築工事の賃金を高くさせ期間も長引かせ範囲も広げさせて人民が潤うようにしたという話である。

史料29では、景公が路寝台が完成しても登ろうとしなかったという。柏常騫が理由を尋ねると台上に梟がいるからだというので、退治したという話である。

史料30でも路寝に景公が座し、この宮殿は将来誰のものになるのだからと心配する話である。

史料31は、景公が路寝の宮に宿泊した際の話である。夜、西方から男性の泣き声が聞こえたので、晏子に尋ねると盆成适という人物で、その母が亡くなったと答えた。そこで確認させると、父の墓が路寝あたりにあつて

葬ることが出来ないということであつた。そこで晏子は景公に願って葬ることが出来たという話である。

史料32も景公が路寝に登って人の泣き声を聞いた話である。梁丘據という人物が母が亡くなって泣いているという話である。

以上、それぞれの記事についてごく簡単に紹介した。史料の引用が限定的でわかりにくいと思われるがご容赦願いたい。次にこれらの記事から『晏子春秋』に見える路寝の特徴を検討したい。

まず史料24によれば、斉の景公が路寝を築こうとしたのに対して晏子が諫めたこととされ、晏子は昔の宮殿は質素であつたと主張している。ここには前章で検討した堯舜の簡素な宮殿が出てこないが、やはり質素な宮殿を良しとする考え方が根底にあることがわかる。そして、「路寝之台」とあるように路寝は高い基壇上に建つ台榭の様式であつたことがわかる。そうした高い基壇をともし大きな建築は本来不要であるという認識があつたということになる。高い基壇に対する否定的なエピソードは他にも巻二・内篇諫下第二、景公春夏獵興役晏子諫第八に見え、やはり景公が太台を造営しようすると晏子が楚の靈王の章華台などの例をあげて諫めている。

ここで引き合いに出されている章華台については、前章にも登場している。翟王の使者が楚に遣わされた際に楚王が自慢したのが章華台であつた。そこでも質素な宮殿の対極として否定的に描かれていた。『晏子春秋』でも同様に扱われていることになる。

台榭に関わるものに史料25がある。ここでは滑稽な面もあるが、路寝台を築いたのに景公自身が登り切れず、やはり晏子に諫められてしまうという内容である。景公としては路寝の高さを高くすることで権力の大きさを示したかったのであるが、逆に登り切れなかったという皮肉な結果になったわけである。このことから基壇の高さが高いことに意味があつたということがうかがえる。つまり、権力を誇示するために高さが求められていたのであろう。なお、この条は銀雀山漢墓竹簡に該当するものがある。異

なるところもあるが大筋は同じである。

次に注目されるのは史料27と31である。前者は亡き母を葬りたいのに墓域が「路寝之台墪下」にあるため出来ないという話、後者はやはり亡き母を葬りたいが墓が路寝の附近にあるため出来ないという話である。いずれも墓域が路寝の敷地内に入ってしまったことになる。特に前者では「墪下」とあるように、路寝が塀などで囲われた一定の区画内にあったことがうかがえる。つまり建物単体で存在していたわけではなく、塀などで囲まれた一つの区画を構成し、その中路寝の建物が建てられていたと推測される。

また、再び史料25を見ると景公は路寝台を登ろうとして登り切れなかった。さらに史料28によると景公は完成した路寝台に梟がいるため恐れて登ることが出来なかった。史料31でも景公は路寝に登って泣き声を聞いている。これらの事例から路寝は必要な時に登って出御する建物であったことがうかがえる。同じく史料31では景公が路寝之宮に宿泊したとあり、逆に普段は別の場所に生活していたものと読み取れる。以上の史料から景公は路寝に生活していたわけではなく生活の場は別にあつたことがわかる。そして、路寝は景公が出御する場であつたのである。『晏子春秋』に描かれている路寝を整理すると、高い基壇上に建つ台榭で、独立した一区画をなす塀などで囲われた一郭内にあり、出御するための生活の場は別に存在したということになる。その場合、路寝が回廊などにかこまれた中にあるa型と回廊が路寝に取り付いているb型の二形式がありうる。そのイメージを図示すると図2のようになる。

次に景公はなぜ高い基壇を造営することにこだわったのかに触れたい。そこで参考となるのが向井祐介氏の所論で、向井氏は中国古来の神仙思想が高層建築としての仏塔建設と結び付いてきたという背景を指摘された⁽²⁾。これを踏まえると、景公の場合は特に神仙思想との関わりは見えない。もちろん記述がないだけで根底にはあつたのかもしれないが、そのまま理解

するとこの段階ではまだ昇仙への憧れは強くなかったのかもしれない。むしろ登って望国したりしていることから自らの権力・権威の象徴としての意味が大きかったと推測される。前に紹介した楚王も章華台を自慢の道具にしていたことも参考となる。高層の台榭が自らの力の大きさを示すものの一つとして認識されていたのであろう。ずっと後世の魏晋時代ではあるが、洛陽の高層建築について田中一輝氏が分析を行って、やはり高さの政治的な意味を明らかにされている。特に「見る」「見られる」という視点に注目されている。この視点は、齊の景公の事例に見える「望国」にも通じるものと思われる⁽³⁾。

そして、その台榭を晏子は昔の質素な宮殿と対比して批判するわけであるが、そこには「堂高三尺」以下の定型表現が使われていない。晏子の活動期にはこの定型表現がなかったのか、あっても認識していなかったのか、あるいは知っていても使わなかったのかなど、いくつかの可能性が想定される。結局、現時点では結論を導き出すことは出来ない。時系列的には『晏子春秋』が『新書』や『史記』より先行するとすれば興味深い慎重に今後の研究の進展に期待したい。

最後に少し大胆な臆測を述べてみたい。図2のように路寝は生活の場とは別に一区画をなしていたとすると、先秦時代の都城遺跡で見つかったきっている宮殿遺構が参考となる。例えば、二里头遺跡の1・2号宮殿や偃師商城など、回廊をとまなう建物が建つ遺構がいくつか見つかっている。時

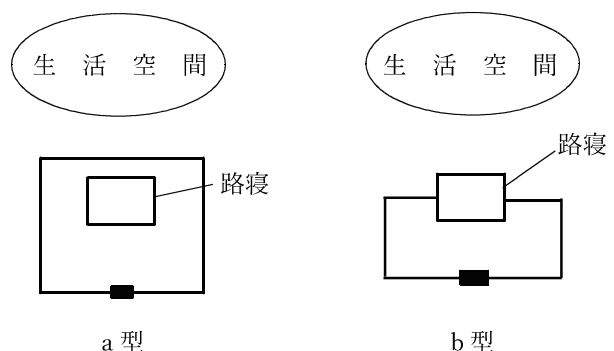


図2 宮内の路寝

代は全く異なるが、こうした遺構が路寝の一郭の姿を考える上で参考になる可能性がある。最初に整理した六寝も六棟がただ並んでいたわけではなく、路寝をはじめそれぞれが回廊などに囲われた一郭をなしていたのかもしれない。これはあくまで推論に過ぎないので、考古学的な研究が進むのを俟ちたい。

以上、仮説的なことも述べたが、『晏子春秋』から斉の路寝の様子を探ってきた。その結果、生活空間とは別に設けられた一郭をなした出御の場であったと推測された。ただし、これはあくまでも文献史料から立論したものであり、『晏子春秋』という限られた書物に依拠している話である。その他の諸侯や周王朝ではどうであったかはさらなる検討が必要である。

おわりに

本稿では先秦時代の路寝、あるいは宮内の宮殿について文献史料に見える言説をもとに探ってきた。文献史料も限られている上、そもそもその言説自体も信頼できるものではない。そうした前提のもとに検討を進めてきた。

検討の結果、堯舜に仮託された古い時代については、質素な宮殿であったとされ、これが一つの理想的な形態と考えられていたことがあらためて確認できた。その際に使われる定型表現も登場してきたが、その典拠については明らかに出来なかった。そして、その理想に反して斉の景公は高い基壇を持つ台榭建築の路寝を造営した。高さへの志向は楚王の章華台にも共通し、神仙思想とは必ずしも直結しないように政治的な意図に基づいていたと推測される。

また、斉の景公の路寝は、塀などで囲われた一郭を構成していたと思われる、二里頭遺跡などで検出される遺構ともイメージが重なる可能性がある。宮殿一棟ごとに一つのユニットとなっていたとも推測できるが、これ

は今後の発掘調査の成果を俟ってあらためて検討していきたい。

本稿で述べてきたことを整理すると以上のようなになる。そもそも真実を伝えているかどうかかわからない文献史料から組み立てたため、現実にもそのようになっていたとは言えない。しかし、この後の時代にもある程度の影響を及ぼす史料群であるから、具体的な宮殿の建築を検討していく上では無益ではないとも思われる。今後、例えば秦以降の宮殿を理解する際に少しでも参考になれば幸いである。極めて曖昧な内容となってしまうが、ここで筆を擱くことしたい。

注

- (1) 吉田歆「古代中国の前殿の創出」(古瀬奈津子編著『古代日本の政治と制度』同成社、二〇二一年)。
- (2) 吉田歆『日中宮城の比較研究』(吉川弘文館、二〇〇二年)、同『古代の都はどうつくられたか―中国・日本・朝鮮・渤海―』(吉川弘文館、二〇一一年)。
- (3) 太田静六「周の六寝および唐の長安・洛陽両宮城と我が国の宮殿との関係」(同『寝殿造の研究』吉川弘文館、一九八七年)、豊田裕章「秦漢から隋唐時代にかけての宮室における前殿と路寝―前期難波宮などの日本の宮室との関りを含めて―」(塚口義信博士古稀記念会編『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』二〇一六年)。
- (4) 『周礼注疏』『礼記正義』『尚書正義』『春秋左伝正義』『春秋公羊伝注疏』『春秋穀梁伝注疏』などは十三経注疏整理委員会『十三経注疏』(北京大学出版社、二〇〇〇年)を参照し、読みやすくするため改編した部分とその体裁のままにしている部分がある。
- (5) 吉田歆「漢魏宮城中枢部の展開」(同『日中宮城の比較研究』、初出は二〇〇〇年)。
- (6) 「此変二命婦一言二世婦」者、明尊卑同也」とある。

- (7) 注(5) 拙稿。
- (8) 郭嵩燾『礼記質疑』卷二、喪大記、五三八～五三九頁(梁小進主編『郭嵩燾全集三、經部三』、岳麓書社、二〇一二年)。郭氏は内子未命の場合と同様に、天子・諸侯は路寝とは別の建物で死去し、その後、遺体を路寝に移したものと推測している。
- (9) 諸橋轍次著・鎌田正・米山寅太郎修訂増補『大漢和辞典』(大修館書店)の「翼」の「翼室」の項。以下同じ。
- (10) 松浦千春『尚書』顧命篇を通して見た中国古代の即位儀礼(『関工業高等専門学校研究紀要』四一、二〇〇七年)。顧命篇の康王即位儀礼解釈については新田元規「蘇軾の「吉服即位非礼」説とその周辺——『尚書』顧命篇の解釈と即位儀礼をめぐって」(『人間社会文化研究』二三、二〇一五年)を参照。
- (11) 『大漢和辞典』の「君」の項。
- (12) 梁思成『中国建筑史』第二章第一節・三五頁(百花文芸出版社、一九九八年)。
- (13) 蕭默『中国建筑史』第二章第二節・三九頁(文津出版、一九九四年)。
- (14) 雷從雲・陳紹棟・林秀貞『中国宮殿史』第一章第三節(三)・二二頁(文津出版、一九九五年)。
- (15) 吉川忠夫訓注『後漢書』第四冊、列伝二、張典伝(岩波書店、二〇〇二年)。
- (16) 青木五郎『新釈漢文大系120 史記一四(列伝七)』(明治書院、二〇一四年)の太史公自序該当「墨者」の語釈(八九～九〇頁)も『墨子』に同様の文があったかとする。
- (17) 吉田賢抗『新釈漢文大系38 史記一(本紀上)』秦始皇本紀二世二年条・三七九頁(明治書院、一九七三年)。
- (18) 『大漢和辞典』の「茆」の項。
- (19) 『大漢和辞典』の「剪」の項。
- (20) 『本朝文粹』卷二、菅原文時「封事三箇条」。
- (21) 谷中信一『新編漢文選9 晏子春秋』上・解題(明治書院、二〇〇〇年)に詳しい。なお『晏子春秋』の解釈は本書と同『新編漢文選10 晏子春秋』下(二〇〇一年)を参照した。
- (22) 向井祐介『中国初期仏塔の研究』終章(臨川書店、二〇二〇年)。
- (23) 田中一輝「魏晉洛陽城の高層建築——「高さ」から見た都城と政治——」(同『西晉時代の都城と政治』朋友書店、二〇一七年。初出は二〇一六年)。
- (付記) JSPS科研費18K00954・22K00889の助成による成果を含むものである。